

■題：「『応答』に導かれて」

■聖書：ヨハネの黙示録 第3章 20-21節（新約 p 457）

■讃美歌：475「あめなるよるこび」 430「とびらの外に」

おはようございます。まず初めに、先日ロシアがウクライナに侵攻を始めてしまいました。多くのミサイルが飛び交い1回の爆音の中に多くの悲しみが生まれていることを心苦しく感じます。早期の終結を祈るばかりでそのような中での今日のこの時を与えられましたことを感謝します。

さて毎年2月も中旬になると花粉が飛び始めます。寒気の影響で例年と比べて飛散開始が遅れているようではありますが、特に昨日あたりから明日まで最高気温が15℃を超える日が続くそうで花粉が多く飛び始めます。今年は例年よりやや少なく、昨年より多くなるとの予想されておりますが、飛散開始が遅れている分これからがすごいことになるのではないかと勝手に想像しています。私も花粉症とは50年の付き合いになります。コロナ禍でのマスク着用は言うに及ばず、耳鼻科から渡された薬を飲み、目薬をさしてしっかり対策して5月の初旬までの3か月間を過ごしていきたいと思います。皆さんも健康管理には充分気を付けていただきたいと思います。

ところで2021年8月1日に何が執り行われたか覚えている方は居りますでしょうか？

そうです、ある兄弟の洗礼式が執り行われました。オンライン配信している都合上個人情報に関わる個人名は敢えて伏せさせて頂きますが、若い男性がこの日洗礼を受けました。「平和主日」であるこの日に受けたいと本人の希望があったと聞いています。洗礼式を横で見ている自分の時の事を思い出しました。

私自身が洗礼を受けたのは1993年4月11日のイースターなのでもう29年経とうとしています。とは言え途中10年位、月定献金は納めてはいたものの礼拝は欠席していた期間、育児休暇が私にもあったことを付け加えさせていただきます。

私の場合信仰の始まりと言えるものは多くの方とは少し異なっています。両親がキリスト教信者で小さい時から当然のようにキリスト教に接していた方、或いは自らキリスト教に関心を持って教会に足を運ばれる方などが多くいらっしゃると思いますが、私は自己啓発セミナーが始まりでした。そうです、自己啓発セミナーを発端とするいわゆる新興宗教が信仰の始まりでした。私の場合いわゆる訪問伝道という形で、引っ越ししたその晩にアパ

ートを訪ねてきてアンケートから始まり意識の高さを誉められ、もっと深く学びましょうと自己啓発を装ったビデオセンターでビデオを見たり、さらなる高みを目指して講演会に参加させられたりしました。その講演会では世界のベストセラーと紹介された聖書を使い少しずつ世の中の原理原則についてとか、世界情勢や愛についての現状の問題点について解説されました。そしてそれらの問題点を解決できるのはメシアだけであり、その使命を背負って降誕されたのがイエスであったと紹介されます。しかしイエスはその使命を全うすることなく十字架につけられ失敗に終わったとされ、今やメシアの再臨を待つしかないことを徹底的に教え込まれました。講演会は1回に留まらず3回も4回も行われます。その度に少しずつ内容が深くなりはするものの、イエスの失敗で話はいったん終わります。講義の内容そのものはその新興宗教の教義なのですが、ある程度理解されたところを見計らって「メシアは既に再臨されている」とある人物の写真が示されます。一瞬会場内は「誰?」といった不思議な空気に包まれました。新興宗教の創設者の写真でしたが誰も知らないその創設者を再臨のメシアとして、彼の歩んできた人生を学び始めます。再臨のメシアが明かされたこの時から私の信仰生活が始まりました。そしてその後は徐々に献身を勧められていきます。仕事を辞めてその宗教団体の為に働くよう時間をかけて、やんわりと説得されていきます。別に献身の他にも第2、第3の選択肢はあるので、本人の意思に任されている面はあります。私の場合もよく祈って決めるよう言われました。

当時の私はとにかくスキーが好きで、週末ごとにどこかのスキー場に行っていました。金曜の夜は早めに仕事を切り上げ、会社の寮に戻って来てからスキー板にワックスを塗り、早々に床に入り、土曜の早朝、車にスキー用品を積んで日帰りスキーへ。そして次の日曜はスキーウェアやブーツ、スキー板の手入れと必要に応じ洗車、の繰り返しでした。ですから宗教が入り込む隙間は無いはずでしたが、やはり人との繋がりに飢えていたんでしょうね。あちらのスタッフの方達がとても親身になってくれるものですから無下にはできないという思いも出てきて、ビデオセンターへと徐々に傾いていく訳です。それでも悪友に誘われれば断ることもせずスキー場に足を運びます。で、新潟の神立スキー場に行った時の事です。「かんだつ」とは神が立つと書きますが、そのスキー場でリフトに乗っている時、珍しくも自分の今後の身の振り方について祈っていました。すると前から雪が同心円状に吹き付けられて、「献身せよ」的な声を聴いてしまいました。「こうなったらもう献身するしかないな」と決意を固めた私でした。後日スタッフの方達にそのことを伝えると非常に喜んでくれまして、一気に退職・献身モードに進んでいった訳です。1991年の1月の頃なので31年前になります。このころが信仰の始まりと言えるのかなと思います。

一応東証一部上場の一流企業である某N自動車会社の厚木にある新車の開発部門につとめていた私でしたので簡単に辞めさせて貰える訳もなく、かなり強引な手口で退職、親の反対を振り切り蒸発同然に家出、と献身前後は非常に痛々しい状況でした。両親との関係修復の為連絡は取ってはいましたが、やがて両親は私の保護・救出活動に没頭するようになります。立川教会の当時の牧師だった愛澤先生や、山梨の都留市にある谷村教会の川崎牧師といろいろ相談していたようです。2回の保護活動を通して、ということは1回失敗しているわけでこの時も私自身2回目の逃亡・かくまわれ生活をしているのですが、教義の間違いやその新興宗教が起こした社会的な問題などを聞かされました。もちろんそんな事くらいで揺らぐ信仰ではありませんでした。お互い話しても埒が明かない事は分かっていたと思います。2回目に保護された時は41日のハンガーストライキ、いわゆる断食をして抵抗しました。しかしやはり膠着状態に陥ってしまい、結局それを打開するため作戦変更、最後の手段として偽装脱会を装い新興宗教団体とは決別した形を取り、一応保護生活は終わりを迎えました。しかし、感の良い人はいるもので、本当に分かったのか環境を変えて再度勉強してもらおうと、脱会後のリハビリという名目で谷村教会の川崎牧師に預けられました。谷村教会内では「41日断食の強者」として噂になっていたようで、どんな怖い人が来るのかヒヤヒヤドキドキものだったと川崎牧師から後で聞きました。

谷村教会は脱会した元信者が多く寝泊まりしてリハビリ生活をしていましたし、相談に来る方も大勢いました。谷村教会でのリハビリ生活は3カ月程続きましたが、その間に新興宗教団体の反社会性や聖書の歪曲した解釈を学びました。脱会に至る経緯も人それぞれ、いろいろな暴露話も聞きました。併せてキリスト教に関する学びの時も与えられ真の脱会者へと変えられていきました。リハビリ終了後は愛澤牧師のサポートとして相談に乗る側になりました。当時はマスコミも取り上げていたためテレビの取材も受けましたし、記憶があいまいですがキリスト教関連の確か「信徒の友」という雑誌の信者の座談会的な記事へも寄稿したこともありました。立川教会でも脱会者のアフターケアの活動が行われるようになって、その関係者でこの会堂がいっぱいになった時期でした。青年会として聖書研究会等の活動も活発になった時期です。教会員の方との摩擦も当然ありましたがその都度切り抜けてきました。

立川教会に通うようになってから暫くして落ち着きを感じるようになったある主日、牧師に受洗に関する相談をしました。受洗の勉強会を始めるにあたり、当時は長老会と呼ばれていた役員会内では一部の方から「まだ早い」と反対する意見があったそうです。しかし、「いつまでとか、何がどうなったらとか明確な基準があるわけでもなく受けたい時が

受け時」と賛成してくれた方もいたそうです。多少の火種を含みながらの受洗準備会が始まりました。細かい事は覚えていませんが今でも鮮明に覚えていることが1つだけあります。それは今回の奨励の題にも使われております「応答」という言葉です。受洗は神様から受けた愛への応答だと当時のテキストにありました。思えば、私の信仰生活は如何に応答していくかが一つのキーワードになっていたのだと妙に納得したものでした。神立スキー場のリフト上での体験からの献身決意、親身になって相談に乗ってくれたスタッフへの思い等々。応答の連鎖の心地良さから抜けられなくなっていたのです。それまでの私は応答の連鎖とはある種無縁とを感じる生活をしていました。常に孤独感にさいなまれていたように思います。私が感じていた孤独感は神様御自身の悲しみと相通じるものがあると感じました。ここで「砂の上の足跡」の話をする予定でしたが、先週の飯島牧師の説教で「砂の上の足跡」の話をされモロに被ってしまったのでここでは割愛させていただきますが、神様は常に私と共におられ、共に歩み支え励ましてくれる。その神様の愛に応える最良の方法が受洗すること。つまり神様への信仰を告白することなのだそうです。

そうして待望の1993年4月11日のイースターを迎えます。頭から水を掛けられますが、少々水の量が多く新調したスーツが頭から垂れた水でビショビショになり今でも恨みになっている、感謝出来ない出来事であることは笑い話としてこれもまた記憶に残っているエピソードです。感謝出来ない洗礼式を迎えた人が一体どれだけいることでしょうか。きわめて貴重な存在であるといえるかもしれませんね。

途中10年程育児休暇を取っていましたが、会計役員の前任で肝臓がんを患っていたHさんの誘いで教会復帰となりました。会計役員の後任候補を探していたようです。その呼びかけに応答する形での教会復帰でした。その半年後Hさんは召天されました。神様は戸口に立って、たたいています。私達は戸を開け神様に中に入ってもらい共に食事をする事ができます。戸を叩いている神様に対し戸を開けるといふ応答をすることで共に食事をするという恵みに与ることが出来ます。とは言え、このことは神の愛に応答した結果の出来事であり応答しようと思わなければ何の意味も持ちません。福音を伝えた後、応答したいと思ってもらうことが大事なのだろーと思います。それも人の力によるのではなく聖霊の導きをもっと祈ることが必要なのだと思います。

祈ります。